博 士 学 位 論 文

7－9 世紀の山東を中心とする
東アジアの文化交渉研究

関西大学　大学院
東アジア文化研究科
朱　紅軍

令和 2 年度（2020 年度）

要 約

現在の歴史研究は、一国史的な視座を越えて、世界の繋がりを重視するグローバルヒストリー、地域間の繋がりを重視する地域史、地方の歴史を重視する地方史などが盛んになりつつある。東アジア史の研究においても、20 世紀の冊封体制論を越えて、東部ユーラシアや海域アジア史などの新しい方法が取り上げられてきている。こうした新しい研究理論に基づき、歴史学・民俗学・地理学・考古学・人類学などの分野において、特定の地方を取り上げた研究が増加している。国や民族・専門分野などの枠組みを越境し、文化を複合的・総合的な見地から解明する文化交渉学も、そうした流れの中で登場した。本研究は、中国山東の文化交渉、特に 7-9 世紀の東アジアにおける山東の歴史・文化などを解明し、単なる中国史という枠組みを越えた東アジア史における山東像を描こうとするものである。

山東は中国東部に位置し、渤海を経て遼東半島を望み、黄海を経て朝鮮半島を望む。7-9 世紀の山東は、海上交通において朝鮮半島諸国と渤海、そして日本と交流し、政治的、経済的および文化的に重要な役割を果たしていた。本論文は、唐にとって東アジアへの窓口の一つであった山東を舞台として展開された唐地方政権と中央政権、東アジア諸国との関係、そして唐と新羅・日本・渤海といった国々を結ぶ交易ネットワークの一軸をなした山東新羅人社会の様相、さらに山東を起点とする東アジアの宗教・信仰に見られる文化交渉に注目した。

本研究は上篇と下篇の二つで構成されている。まず、上篇は山東地方政権である淄青平盧節度使の海外への進出、新羅人社会への統制について検討した。第一章では、山東地方を半世紀統治した李正己一族の台頭およびそれ以後の淄青平盧節度について、特に押新羅渤海両蕃使の兼職と、海外への進出の試みに注目した。李正己一族は唐王朝の藩鎮勢力として、国内で勢力を拡大しつつ、国内外の交易にも従事している。その後の淄青平盧節度使も、李氏一族の手法を学びつつ、東アジアの海上勢力を再編した。淄青平盧節度使は唐中央政府・新羅・渤海と緊密な関係を保ちつつ、時には自ら新羅に使節を派遣し、さらに渤海使を通じて日本との交流も試みた。また蕃坊の例と同じく、淄青平盧節度使兼押新羅渤海両蕃使とその出先機関の勾当新羅所は、往来使節・海外との交易・通関や新羅人社会への管理に関わる諸々の業務を担った。

第二章においては、山東で形成された外国人集団である新羅人社会の分布や内部の権力構造と管理制度を明らかにした。7 世紀以降、山東に移住する朝鮮半島の移民が増え、登州や莱州、密州など山東沿岸部で数多くの新羅人が居留地を形成していた。9 世紀前半は、張保皐が登州で赤山法華院を建設し、多くの新羅人が宗教・交易・外交活動を行うことで、在唐新羅人の居留地の規模も拡大した。本研究では、この登州新羅人社会の

管理・支配のあり方を明らかにするため、『行記』の中で円仁が「大使」と記す人物に着目した。まず、開成年間の記録に登場する「林大使」は、開成年間における登州新羅人社会の長であった。会昌年間になると、張詠という人物が押衙から十将に昇進した後、「大使」の呼称を用い、権限も拡大したことから、「林大使」に代わって、登州新羅人社会の長になったと考えられる。楚州新羅坊薛詮と劉慎言と権力の交替にともない、円仁の「大使」の用いる対象が薛詮から劉慎言に変る点も証明できる。

下篇においては、山東で祀られている龍王信仰と赤山明神をとりあげて、東アジアにおける宗教・信仰の伝播と変容詳細を考察した。第一章では、山東沿岸部における龍王廟の現地調査によって、数多くの龍王廟が現存しており、これらは大漁祈願と航海安全の神として祀られていること、次に龍王廟には唐代以前まで遡れるものがあること、そして砣磯島の石碑文と『太平広記』から 7-9 世紀の山東に龍王信仰が存在したこと、などを確認した。一方、文献史料からも日本承和度遣唐使が山東の海域で海龍王と五方龍王の祭祀を行っており、さらに日本と新羅の僧侶の渡海時における龍王信仰との関りも確認された。このように、山東と朝鮮半島や日本と共に築いている東アジア海域には航海信仰としての龍王信仰の存在が証明される。しかし、日本と新羅の事例は入唐僧の渡海ばかりで、仏教信仰との直接な関係が物語っている。これは南北朝において山東で盛んに広がっていた弥勒信仰と深くかかわりがあると想定している。

第二章では、円仁によって山東の赤山から日本に請来された赤山明神を中心に、その伝来の背景及び神格・像の変化などについて論じた。まず、『入唐求法巡礼行記』の記述を中心に、赤山明神の本来の姿は海龍王であることを指摘した。『行記』には、赤山明神や赤山神などの呼称が見られないが、地方神、登州の山神や島神、赤山の龍宮などの記録を基に、遣唐使が航海中で祀った地方の神は赤山の龍宮で祀られている海龍王と同じく、航海神としての海龍王である可能性が高い。しかし、9 世紀末頃に成立した『慈覚大師伝』は、『入唐求法巡礼行記』の内容を継承する一方、赤山明神についての内容が大きく変化している。赤山明神は仏教との関係が大きくなり、山神の神格として定着した。鎌倉時代においては、泰山府君との習合が示唆されており、『吾妻鏡』に登場する泰山府君祭も、この記述を裏付けるものとなっている。赤山明神の像は平安時代の笏を持ち、表衣を着た文官の姿が鎌倉時代の弓箭を持つか背負う老翁の姿に変化したことが分かった。南北朝以降はさらに多くのものと習合し、その性格を特定しがたい複雑になった。このように赤山明神に関する記述は、赤山禅院の造営と神祠の記事は時代により変化した。

以上のように、山東は唐の窓口として、東アジアの朝鮮半島諸国・渤海・日本との通路のみならず、政治・外交・軍事及び交易などにおける中心地となり、その歴史像はさらに有意義なものになった。また、山東はその盛んな海洋活動から海洋信仰が次第に重

視され、使節・僧侶・商人を通じて、周辺地域に伝わっていたが、新羅や日本においては、山東の海洋信仰を受容しつつ、自国文化と結びつき変容をなした。